アメリカのゆくえ
――世紀転換期のHearnとDreiser

宮　澤　文　雄

はじめに

Lafcadio Hearn（1850-1904）がアメリカで暮らした1869年から1890年の期間は、南北戦争が終わり、かねてから進行していた産業化があらゆる方面で展開し、アメリカが資本主義国家として大きく変容していく時期と重なる。

Hearnがはじめてアメリカの土を踏んだ1869年は、大陸横断鉄道が完成した年だった。鉄道網の拡がりと並行して電信が敷かれ通信網が拡張すると、広大なアメリカの空間にこれまで点在していた諸地域が結びつき、そこから生まれた様々な交流によってアメリカの近代化はいっそう押し進められた。東部と西部の流通が容易になり、東部からは工業製品が、西部からは食料が供給され、それぞれの生活には夢と豊かさがもたらされ、アメリカ生活の画一化が進んだ。

こうした経済活動を背景に、当時、生産物の集積地だったシカゴは、ニューヨークに次ぐアメリカ第二位の都市へと急発展した。この都市化現象は驚異的だった。鉄鋼を用いた高層建築物は威容を誇って立ち並び、そこに無数の資本家がオフィスを構えた。労働者の人口が急激に増えると、大量移動手段であった市街電車などの公共交通システムが普及し、都市はますます巨大化していった。ガスや電気の普及は、都市生活を快適にしただけでなく、街灯照明が都会の闇夜を照らし、幻想的な時空間を演出した。こうしたテクノロジーの発達と人口増加は、都市構造を変えただけでなく、大量生産による大量消費を生み出し、モノと人の関係を再定義し、新しい感性を育んだ。百貨店や劇場の出現によって、人々はそこで数々の魅力的な商品と出会い、めくるめく時間を過ごし、無自覚といってよいほど飽くなき消費へと掻き立てられた。この消費活動にともなう快楽や所有といった欲望は、新しい時代感覚として都市生活の隅々まで浸透した。そうしたアメリカの目覚ましい発展には大量の労働力が求められ、その恩恵にあずかろうとする大勢の移民たちが海を越えて押し寄せることになった。

Hearnの渡米もこの時代のうねりに巻き込まれたものと考えられるが、興味

深いことに、彼はアメリカに到着すると他の移民とは異なる行動をとる——フロンティアを目指すことなく、オハイオ州シンシナティ、ルイジアナ州ニューオーリンズ、西インド諸島マルティニークへと南下し、国勢調査局がフロンティアの消滅を報告した1890年、日本へと旅立つ。Hearnの足跡は一見すると無軌道であり、当時のアメリカ社会の動向の中で異質な存在であると思われても不思議ではない。たしかに、アメリカにたどり着いた移民の多くが開拓を通じてアメリカ人になっていく時代の潮流にあって、Hearnはそれに倣わなかった。再び海を渡って、今度は行き着いた日本で、国籍を変え、名を小泉八雲に改め、日本文化について書き続けた。こうした足跡が、Hearnをいっそう特異な立場にし、現に文学上の意味においてアメリカとの接点はこれまでほとんど見出されてこなかった。

しかし、彼がアメリカ時代の大半をジャーナリストとして活動していたことから推測できるように、Hearnは社会の情勢や変化は言うまでもなく、当時の文壇に対してさえ無関心ではいられなかった。記者時代には、文章技術を磨いただけでなく、地域特有の方言、風俗、自然が豊かに描かれた中篇小説*Chita*（1888）と*Youma*（1890）を出版し、近代化によって失われてゆく地方に対する危機意識から生まれたローカル・カラー文学の動きと軌を一にする。それだけでなく、この2冊の刊行は、Hearnの文学観がこの時期にかなりの程度形成されていたこともまた示唆する。そして彼が生涯にわたって、英語で書き、アメリカの出版社で作品を発表し続けたという公然たる（だが、見過ごされてきた）事実が物語るように、Hearnは太平洋に隔てられてもなおアメリカとかかわり続けた文学者だった。

世紀転換期の変容するアメリカの文脈においてHearnをどのように位置づけることができるのか。本稿では、Hearnのアメリカ時代と日本時代の連続性を探りつつ、文学上のHearnの特異性を検討する。その際、意外な取り合わせに思われるかもしれないが、同時代のTheodore Dreiser（1871-1945）との比較を通して、Hearnもまた「アメリカ作家」であったことを明らかにしていく。

1．アメリカ時代の文芸評論

単身で移民船に乗り込み太平洋を渡ってきた19歳のHearnは、当初の目的地であったシンシナティにたどり着くものの頼るべき人に見捨てられ、ほとんど無一文の状態で職を転々とする。やがて、同地の『インクワイアラー』紙と

『コマーシャル』紙で職を得ると、ジャーナリストとしてのキャリアを歩み始める。27歳のとき、シンシナティからニューオーリンズへ移ると、そこで創刊まもない『アイテム』紙の副編集者となり、その後、南部の有力新聞『タイムズ・デモクラット』紙に実力が買われ、文芸部長として迎え入れられる。タイムズ・デモクラット社を辞めた後、西インド諸島マルティニークへおよそ2年滞在することになるが、この期間も含めるとアメリカ生活は20年にも及び、19年間のヨーロッパ時代、14年間の日本時代よりも長い。そして、その大部分をジャーナリストとして活動したことを考慮すると、この経験がHearnの文学観の形成に関わっていることは想像に難くない。

Hearnが書いた1000を超える夥しい量の記事の中で、アメリカ文学に関連するものは、ニューオーリンズ時代に書かれた文芸評論である。現在ではアメリカ文学史の中枢になっているRalph Waldo Emerson、Henry Wadsworth Longfellow、Walt Whitman、Mark Twain、William Dean Howells、Henry Jamesに加え、今日ではあまり日の目を見ないBret Harte、Joaquin Miller、George Washington Cableといったマイナー作家たちが、「現在の作家」としてHearn独特の基準から論評されている。これらの文芸評論には、Hearnの好みや偏見が包み隠さず反映されているため、現代の文学史と同じような評価が必ずしも与えられているわけでない。だが、むしろそうであるために、文芸評論を通じてHearnの文学的関心はどのようなものに向けられていたのかを読み取ることができる。

現在ではTwainに関連して扱われる地方色作家Harteについては、“Mr. Harte was never a great writer, and that the little stock of capital in the shape of personal adventure which had given him fame is now exhausted”（*Essays on American Literature* 1）という『ニューヨーク・ワールド』紙の批評に対し、“Harte affords a striking exception to the rule, proving himself gifted with the true spirit of romanticism, a rare power of imagination, a fine gift of perception, and a sensitive sympathy of soul which responded to the presence of the smallest redeeming trait in the rudest nature”（2）と擁護し、“a great writer of realistic fiction”（2）と現代では見られない高い評価を与える。

また、野口米次郎と交流のあった詩人Joaquin Millerに対しては、“his work is rough and lacks scholarly polish”（203）と弱点を認めつつも、“one of the most original poets of the century”（203）と激賞する。他方、今日ではアメリカ文学

の傑作のひとつに数えられている*Leaves of Grass*を書いたWhitmanの才能は“indecent and ugly, lascivious and gawky, lubricous and coarse”（93）と酷評する。[1] さらには、相手が文壇の重鎮であっても全く臆することなく、Howellsのリアリズム文学に対しては繰り返し容赦ない裁断を下した——“His philosophy seems to be that of a school-boy, and his power of criticism limited to Sunday-school standards,—good and respectable standards in their way, but never intended for the measurement of centuries and civilizations”（192-193）。

Hearnの文芸評論から伝わってくることのひとつに、その時点、その時点で判断していかなければならない時評としての難しさがある。また、同時代のさまざまな作品、作家を知りえたことで、Hearnは最新の文学潮流に精通し、さらに批評を通じて自らの文学観に明確な形を与えることができたことである。それゆえ、Hearnの見方と現代批評の評価が異なるからといって、直ちにHearnの鑑識眼を疑うことはできない。好悪がはっきりしているところは、文芸評論家としてのHearnの潔さであると同時に、彼の文学的志向が顕在化するところだからだ。

アメリカ時代のHearnの功績のひとつに、Théophile GautierやGustave Flaubert、Guy de Maupassant、Pierre Lotiなど多くのフランス文学の翻訳紹介がある。[2] その中で取り上げられた作家のひとりにÉmile Zola（1840-1902）がいる。Hearnの文学観が最も強く表明される瞬間は、自らの主義に対する脅威と対峙したときである。それがZolaの自然主義だった。1881年の『アイテム』紙に掲載された“Naturalism”というエッセイで、“One thing we do know—that the highest art does not consist in the faithful copying of living models, but in the idealization of the best peculiarities and characteristics of those models”（*Literary Essays* 19）とHearnは主張する。ここでHearnは理想主義を標榜している。[3] この立場とゾラの自然主義は相容れない。1884年に『タイムズ・デモクラット』紙に寄せた“Idealism and Naturalism”において、“The duty of naturalism was to destroy idealism—to paint life as it is,—to depict precisely what idealism seeks to conceal”（*Essays in European and Oriental Literature* 11）と述べているように、Hearnの中で二つの主義は対立関係にある。というのも、理想主義とは、人が目指すべき目標となるような高次の道徳を示し、その追求に人を駆り立てていくものであるのに対して、悪徳行為や醜悪な出来事を描く自然主義は、道徳を高めるのに有用であるわけでもなく、たとえ道徳的な行為を描いたにせよ、作者の見聞の域を出るもので

はなく、人の模範になるようなものではないとHearnは考えていたからである（*LE* 19）。Hearnにとって最高の芸術とは、人間のあるべき姿を描くことであり、人間をあるがままに描くことではなかった。それゆえ、自然主義は“a very sterile art”（19）と断罪される。

Hearnはさらに、あるべき姿を描こうとする理想主義には想像力が重要であることをたびたび強調する。

> In order to progress morally we must have an ideal; we must imagine something nobler and better than what we see and hear; we must suppose something superior to ourselves; we must admire something above and beyond the commonplaceness of this world. Naturalism is the enemy of idealism; . . . .（19）

現実を超えた先にある「何か」とは、想像力によって創り出される理想のことである。Hearnは“Imagination [still] rules the world”（*LE* 20; *EEOL* 14）というナポレオンの言葉を繰り返し引用しながら、人間の悪徳、欠点、愚行をあるがままに忠実に描く自然主義に抗し、“the unreal, the impossible, the unattainable”（*EEOL* 14）を追求する想像文学こそ真に時代が必要とすべきものであると訴える。

自然主義をはじめて紹介した、先のエッセイ“Naturalism”は、“As yet the new school of naturalistic literature is but very little known to English readers, although it is exerting a vast influence in France”（*LE* 18）と書き出され、自然主義に属する作家の数は急速に増えることはないと指摘したうえで、その流派を正当に評価できるのは“an experienced newspaper reporter”（18）だけと述べる。アメリカで自然主義が広まることをどの程度Hearnが予見できていたかは実のところ判然しないが、少なくとも、当時のアメリカには自然主義の手法を使いこなす才能は育っていた。Malcolm Cowleyが“When describing crimes of violence, their reporters were advised to copy the methods of the French naturalists”（３）と述べているように、急速な都市化を背景に、貧富の格差が広がり、腐敗や暴力事件の絶えない当時の不安定な社会状況と現実をあるがままに描く自然主義は、新聞記者によって積極的に結びつけられ、記事の執筆を通して文学的可能性が模索されていたと考えてよいだろう。事実、“[Ambrose] Bierce, [James] Huneker, Harold Frederic, Stephen Crane, David Graham Phillips and [Theodore] Dreiser”（３-４）と

いった錚々たる顔ぶれが新聞記者からキャリアを積み始めていた。Hearnもまたそのうちのひとりだった。[4]

1860年代後半から執筆活動に入っていたZolaは、Hearnのエッセイ“Naturalism”が掲載された前年の1880年に「実験小説論」を発表し、その流れにMaupassantも加わって、Hearnが指摘したとおり、すでにかなり勢いづいていた。Hearnは“The effect of naturalistic literature upon public morals remains to be seen. It can so far only be guessed at”（*LE* 18-19）と述べているが、1881年から6年以上にわたって自然主義を批判する文章を執拗に書き続けたことからも、この流派がアメリカ国内で広まることを危惧していたと推測できる。しかし、結果は周知のとおり、アメリカでもCraneの*Maggie: A Girl of the Streets*（1893）に代表されるように1890年代には自然主義文学が台頭する。その意味において、Hearnの理想主義は自然主義の前に敗北したかに見える。

だが、Hearnの理想主義への信奉は、それ以降、弱まるどころかむしろ強まっていくのである。現に自然主義がアメリカに芽生え始める1890年、Hearnは自らの理想主義を具現化した小説を生み出す。

2．深化する理想主義

Hearnは自らの理想主義を色濃く反映した*Youma*を世に送り出す。彼は生涯で*Chita*と*Youma*の二作しか小説を書いていないが、いずれもプロットや心理描写が未熟で習作の域を出ていないとみなされ、これまで低い評価しか与えられてこなかった。牧野陽子が指摘するように、近年では、評価を下げる原因になっていた物語の展開を妨げる過度の自然描写、地域方言や民話などの民俗学的要素といった非小説的要素をHearnの独自性として見直す動きもある。しかし、こうした意見はHearnが小説家としての能力の限界に気づいたことと結びつけられ、執筆当時のHearnの「眼目」は検討されてこなかった。それは、タイトルが示すように「主人公の造形」にあるという（牧野 73-74）。本稿では、主人公YoumaをHearnの理想主義が託された登場人物として解したい。

小説*Youma*は、マルティニークの農園を舞台に、白人と黒人の人種間で、乳母としての義務と恋人への愛の間で苦悩する混血娘Youmaの姿を描く。重要なのは、暴動に巻き込まれたYoumaが、育ててきた白人の幼子Mayotteを見捨て自分だけが助かることを拒み、恋人の黒人青年Gabrielの目の前で幼子と共に焼かれていく結末の場面である。

Youma remained at the window. There was now neither hate nor fear in her fine face: it was calm as in the night when Gabriel had seen her stand unmoved with her foot on the neck of the serpent.

Then a sudden light flared up behind her, and brightened. Against it her tall figure appeared, as in the Chapel of the Anchorage Gabriel had seen, against a background of gold, the figure of *Notre Dame du Bon Port*. . . . Still her smooth features expressed no emotion. Her eyes were bent upon the blond head hiding against her breast;—her lips moved;—she was speaking to the child. . . . Little Mayotte looked up one moment into the dark and beautiful bending face,—and joined her slender hands, as if to pray. . . . Never to Gabriel's watching eyes had Youma seemed so beautiful.（*Youma* 190-191）

ここでHearnは、絶命の危機に瀕しながらも落ち着きと美しさを失わず、あわれな幼子に対して優しく慈愛に満ちた聖母としてYoumaを描いている。白人主人にYoumaとの結婚を認めてもらえず、結果的に奴隷の暴動に加担することになったGabrielとの対照的な構図のなかで、Gabrielに対する激しい恋心を抑え、乳母としての義務を堅持し、たとえ自由のためであっても裏切りや人殺しにつながる行為には非難の声をあげ、己の弱さのために正義から目をそらし強者に盲従することを認めないYoumaに、清らかな聖母イメージを重ねることによって、HearnはYoumaの自己犠牲を賛美する。たしかに、結果的に黒人側ではなく白人側を選ぶYoumaの振舞いを疑問視する者もいるかもしれない。だが、Youmaの混血が暗示するように、彼女はどちらかに属す存在ではない。二つの人種の板挟みになる苦しみの原因であった混血は、Youmaの理解と行動を通じて、やがて人種という枠組みを乗り越えていく力へと転じ、新たな可能性に拓かれていくものだからだ。

この小説を発表した直後、Hearnは日本へ旅立つ。来日後もこの志向性は途切れることはなく、今度は日本を題材に自己犠牲の物語を数多く執筆する。ランダムに挙げていくと、1891年の大津事件に取材した、国難を憂いた天皇の悲しみを自死によって慰めようとした一般女性を描いた“Yuko”、1854年に和歌山を襲った津波に基づき、押し寄せてくる津波の危険を村人たちに知らせるために、自らの財産である稲むらを燃やしたのろしによって命を救った老

人を描く“A Living God”、子どもの病気を治してもらうのに自らの命を差し出す“Ubazakura”、才知と美貌に恵まれた芸者だったが、他者の幸せを考えて自己を抑制した末に尼となる“Kimiko”など、Hearnは実際の出来事や原話を理想化して語り直し、利他的な自己犠牲の物語を繰り返し生み出している。これらは、アメリカ時代の*Youma*に連なる作品群として見做せるだろう。

アメリカ時代と日本時代の連続性に関して、伝記*Young Hearn*を記したO. E. Frostは、結末で次のように述べる。

> Aside from a chastened, simpler style which he was already beginning to develop in the West Indies, “Japan [as Albert Mordell puts it bluntly] gave him nothing.” In truth, America offered him a greater variety of writing experience for mature growth and mature expression; there is very little that he undertook in the Orient that he did not first take up in the Occident. Translation from the French, literary criticism, folklore gleanings, and travel sketches—these were his writing fields, fields first found in the United States. . . . America was the land of his apprenticeship, the land of his incipient master workmanship. America was his teacher, and—for more time than any other—his adopted country.（Frost 217-218）

Frostの主張を要約すれば、Lafcadio Hearnという作家の個性はアメリカで完成してしまい、日本におけるHearnの活動はアメリカ時代の延長に過ぎないということになる。伝記のタイトルからも推測できるように、Frostは来日以前のHearnしか扱っていない。そのこと自体にすでにFrostの主張は集約されている。たしかにFrostが指摘するように、日本におけるHearnの創作ジャンルはほぼアメリカのそれを引き継いでいるため、Hearnの文学的志向性はアメリカ時代にほぼ確立したと考えられるが、それでもFrostは結論を急ぎ過ぎたように思われる。

むしろ、Hearnがアメリカ時代に形成した志向性を、日本という異文化の中でも継続し得たことに驚きがある。日本でも繰り返し描かれた自己犠牲の物語は、Hearnがずっと模索していた西洋の理想的なありようを東洋の生活の中に発見したことを示している。それができたのは、アメリカ時代にはなかった経験である日本の家庭や教育を通した発見と考察を重ねたからだ——“He knew

Japan, not as an observer, but as a citizen, the adopted son of Japanese parents and the father of Japanese children”（Cowley 14）。Hearnは、理想主義に関わる題材を数多く提供する日本という創作生活環境を得たことで、自らの主義に対する信頼と確信をますます深めていったと考えられる。Hearnは時代の流れに反して理想主義という古臭い文学観から脱しきれなかった作家ではなく、むしろそこに留まり続けることができたからこそ、自らの文学観を深化させることができた。Frostに誤りがあるとすれば、日本生活を通してHearnの独自性は深化していったという点を見逃したことだろう。

３．世紀転換期のHearnとDreiser

日本でHearnが理想主義的傾向を強めながら創作していたとき、アメリカでは都市を舞台に新しい時代感覚を描いたTheodore Dreiserの*Sister Carrie*（1900）が登場する。都会の生活に憧れてウィスコンシン州からシカゴへやって来たCarrie Meeberは、列車で知り合ったセールスマンに誘惑され、次に高級酒場の支配人で所帯持ちのGeorge Hurstwoodに誘惑され、ニューヨークへ駆け落ちする。大都市の消費空間に魅了され、気分や衝動といった欲望の赴くままに生きるCarrieは、新しい時代感覚を持った当時のアメリカの若者の典型である。彼女は、たとえ他人の窮乏を知っても心を痛めるだけで、自分の居心地のよい場所を踏み越えて寄り添うだけの確たる自己も意志も持たない。Carrieの利己的な刹那主義は、道徳的な判断力や利他的な生き方を尊重するHearnの主人公たちとは真っ向から対立している。

発展途上にある日本について記した紀行文“In Osaka”で、Hearnは次のように述べる。

> It is not true that Old Japan is rapidly disappearing. It cannot disappear within at least another hundred years; perhaps it will never entirely disappear. Many curious and beautiful things have vanished; but Old Japan survives in art, in faith, in customs and habits, in the hearts and the homes of the people: it may be found everywhere by those who know how to look for it. . . .（*Gleanings in Buddha-Fields* 118）

道徳や倫理を重んじる人間観が日本ではいまだ失われず、高次元で達成され

ていることをアメリカに向けて発信し続けるHearnの作品を、*Sister Carrie*が描くような消費資本主義が肯定する欲望主体の人間観への対抗として位置づけられるのではないか。Hearnは「日本の優れた道徳性を西洋に語り伝えることで、その読み手に、それまでの自制を軸とした道徳的社会の意義を再確認させる」（347）と中川智視が指摘するように、Hearnの日本についての一連の考察は、西洋に日本を紹介するという目的ではなく、西洋の理想を東洋に再発見することを促すものだったのだ。もしもHearnがあのままアメリカに留まっていたとしたら、南部のジャーナリスト、地方色作家の域から出ることは難しかっただろう。日本という題材に触れて自らの主義主張を深化させ、アメリカを外から眺めるという特異な視点に立てたこと、つまり東洋を通して西洋を見つめ直せたからこそ、Hearnを、道徳倫理が衰退し、それに代わって衝動や欲望が肯定されていく世紀転換期のアメリカ社会を諫める作家として配置できるのである。

また、Dreiserの*Sister Carrie*には、Hearnのこだまが聞こえてくるところもある。作中で唯一の知識人として登場するRobert Amesは、小説の終盤で、喜劇女優として成功したCarrieに対して、もっと上質な芝居をやるべきだと助言した後、次のように説く。

> “The world is always struggling to express itself,” he went on. “Most people are not capable of voicing their feelings. They depend upon others. That is what genius is for. One man expresses their desires for them in music; another one in poetry; another one in a play. Sometimes nature does it in a face—it makes the face representative of all desire. That’s what has happened in your case.”（*Sister Carrie* 341-342）

Amesは、Carrieの芝居をより高い目標へ導こうとする。それは、自分の思いを言葉にできない人々に向けて、手本となるような理想的な人間の役のことを仄かしている。そうした芝居に取り組むことは、これまでの芝居とちがい、自己を表現できずにもがき苦しんでいる他者のためにすることであり、利他的な行為と呼べるだろう。物語の終盤で、Carrieが華やかな都市生活や社会的成功に潜む虚しさに気づきかけたときに、知識人Amesは啓蒙的な役割を担って現れるため、Hearnのような理想主義を共有していると見做すことができる。だとすれば、この作品には、利己主義を諫めるHearnのこだまが聞こえてくる。

その声は、都市の幻惑から抜けきることのできないCarrieに届くことはないにせよ、Dreiserは世紀転換期のアメリカを描くにあたって、Amesを通してHearnに近い考えも作品に刻み込んでいたのである。そもそも本作は、女工から女優へ駆け上がるCarrieの成功だけでなく、高級酒場の支配人からホームレスへと転落するHurstwoodの破滅も描いている。Carrieのロッキングチェア運動、Hurstwoodが運転する列車の往復運動が暗示するように、登場人物の状態は安定せず、成功と破滅の間を絶えず動いている。この流動性に、世紀転換期アメリカの揺れ（不安）を見ることができる。*Sister Carrie*は欲望を肯定する声と否定する声のせめぎ合いを描くが、そうした二つの声が反響していたのが世紀転換期アメリカの状況だったのである。

大きく社会のありようが変わろうとする中で生じた世紀転換期の不安は、Hearnにも、Dreiserにも見ることができる。かかわり方に違いはあれ、アメリカの内と外で、Dreiserは新しい人間観の是非を問い続けることによって、Hearnは古い人間観に意義を見いだすことによって、アメリカのゆくえを案じた世紀末のアメリカ作家であったのだ。

Notes

本稿は2018年６月、日本アメリカ文学会中・四国支部の第47回大会シンポジアム「ラフカディオ・ハーンとアメリカ文学」での発表報告を改稿したものである。

1　HearnのWhitman評の揺れについては、Albert Mordellに詳しい。

2　Hearnに関する研究はさまざまな観点から行われてきたが、Hearnの翻訳紹介が当時のアメリカ文学とどう関連していたかはまだ十分に明らかになっていない。

3　理想主義に関するエッセイは、“The Future of Idealism”、“Realism and Idealism”もある。*Essays in European and Oriental Literature*を参照。

4　特にシンシナティ時代の記事には自然主義の影響がよく表れている。

Works Cited and Consulted

Clubbe, John. “Lafcadio Hearn as an American Writer.” *Lafcadio Hearn in International Perspectives,* edited by Sukehiro Hirakawa, Global Oriental, 2007, pp.93-102.

Cowley, Malcolm. “Lafcadio Hearn.” *The Selected Writings of Lafcadio Hearn,* edited by Henry Goodman, Citadel Press, 1994, pp.1-15.

Dreiser, Theodore. *Sister Carrie,* edited by Donarld Pizer, Norton, 2006.

Frost, O. W. *Young Hearn.* Hokuseido Press, 1958.

Hearn, Lafcadio. *Essays in European and Oriental Literature,* edited by Albert Mordell, Dodd, Mead and Company, 1923.

---. *Essays on American Literature,* edited by Sanki Ichikawa, Hokuseido Press, 1929.

---. *Literary Essay,* edited by Nishizaki Ichiro, Hokuseido Press, 1939.

---. *The Writings of Lafcadio Hearn.* Rinsen, 1988.

Mordell, Albert. “Introduction.” *Essays on American Literature,* edited by Sanki Ichikawa, Hokuseido Press, 1929, pp.vii-xxxiii.

中川智視「ある「西洋の」保守主義者——ラフカディオ・ハーンと一九世紀のアメリカ」『言語社会』，第 2 号，2008年，340-353頁.

牧野陽子「民話を語る母——ラフカディオ・ハーン『ユーマ』について」『講座 小泉八雲II ハーンの文学世界』 平川祐弘・牧野陽子編，新曜社，2009年， 69-101頁.